るだけでした。ここの家は、田名部にもましてひどいものでした。

春もおそくなったある日の夕方、東京に勉強のため残っていた五三郎兄が、突然落の沢にやってきました。太一郎兄が、藩の罪を負って牢屋につながれていることを知って、父を助けるためにやって来たということです。

五三郎の応援を得て佐多蔵も大よろこびし、力をあわせて開こんにはげむことになりました。五三郎は、家がせまいので、百二十米ほどはなれた小高い丘の上にある「呑香稲荷」とよばれるお堂に寝起きすることにしました。ここはふとん類は全くなく、炉もなく俵やむしろにくるまって寝るだけでした。五三郎は、五郎が学校にも行かず、本も全然開かないようすをみておどろき、また心配しました。いくらかでも勉強をはじめるために、五郎も夜はお堂にきて五三郎兄と一緒に寝ることにしました。

やがて五郎は、五三郎兄のはからいで、田名部にある藩の学校、「日新館」に